
魔法少佐アナベル・ガトー

無目藻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少佐アナベル・ガトー

【Nコード】

N5500Y

【作者名】

無目藻

【あらすじ】

アナベル・ガトー。ソロモンの悪夢。

かれは戦死後、不思議なことに高町なのとして再び人生を歩んでいくこととなった！

武人の誉れを尊ぶ少女、高町なのは！彼女が空を駆けるとき、戦士達の叫びが木霊する・・・。

スーパールトラ不定期更新でいっす

第一話 プロローグ（前書き）

注意！Caution！

この二次小説は非常にカオスなものとなっております。

原作陵辱を嫌う方、ロリなガトーを許容できない方、変な文章についてこれられない方、ニナ・パープルトンの声とパン工場で働く女性の声と同じだということに驚きを隠せない方、シーマ様とクレシんの風間君が同じ声だと知らなかった方、アクシズ先遣艦隊の方、心臓の弱い方にはお勧めいたしません。

第一話 プロローグ

アナベル・ガトーは連邦軍から『ソロモンの悪夢』と恐れられたモビルスーツパイロットである。

そんな彼は宇宙世紀0083年11月13日、星の屑作戦完遂の後、小惑星アクシズへ向かう同志を護るため散った。

散った、と言っても死んだ訳ではない。

いや、確かに肉体的、医学的には間違いなく死んだ。

しかし、彼の不屈の魂は滅びず、時空を越え、ある世界のある街のある少女に入り込んだ。

そして、その少女は後に『海鳴の悪夢』と呼ばれるようになる。

side アリサ・バニングス

「なのは〜!」

私は親友の名を呼んだ。

その親友の名は高町なのは。この私から二つ名を剥ぎ取った張本人だ。

私はちよっと前まで『不死身の第四小队』とか『不死身の釘宮』と呼ばれていた。いや、由来は知らないけど。

でもある日、クラスで傍若無人に振る舞っていた私になのははピントを喰らわせた。

『何するのよ!?!』

私は当然怒る。でもね、なのははその後私のことをキッと睨んだんだ。

『情けない!』

そういったときのあいつの目はまさしく『サムライ』だった。

その後、当然のごとく喧嘩になったんだけど、なんか殴りあって

るうちに友情が芽生えたんだ・・・って何処の青春ドラマだよ。

そんなことはさておき、私が声をかけるとなのははこちらに顔を向けた。

「おお、アリサか」

「すずかは？」

「じきに出てくるだろう。やつは友との約束を破るような女ではない」

なのはの目はどうみても小学生の目じゃない。数々の戦いを経験した戦士？そんな感じだ。

でも、私ともう一人の親友、すずかは何故かなのはと気が合うんだよね。

side out・・・

続く

第一話 プロローグ（後書き）

とりあえずプロローグです。次回からなのはことガトーさんメインとなります。

優先的に書かなければならないものがあるのでこれの更新はかなり不定期になると思いますが、どうかよろしくお願いいたします。

第二話 魔法の呪文はアナベルなの（前書き）

この形式の書き方ははじめてなので精進していききたいです。

第二話 魔法の呪文はアナベルなの

side なのは（ガトー）

私は高町なのは。

実際はアナベル・ガトーというのだが、いつのまにかこうなっていた。

初めは驚いた。私は誇り高きジオン公国軍人だったはずだ。

それが目が覚めるとこのようないけな少女になっていたのだ。・・・ところが、悲しいことに私はそれに慣れてしまった。いや、それはそれで満足している。新しい次元の友人もでき、家族の温かみを知った。

しかし、私は声無き声で叫ぶ。「違う」と。

私は軍人だったからこそ自分を見いだし、大義を持てたのだ！それを今では無くしてしまった！その虚しさ、そして怒りは私を苦しめた。

が、それも今日で終わりとなる。私はこの世界で自分の生きざまを見いだすことができたのだ。

side out――

side 淫獣

待て、待て待て。なんだこの『淫獣』って。馬鹿にしてんのか。

・・・まあ、いい。今はそれどころじゃあないんだ。

僕は取り返しのつかない失敗をしてしまった。

ロストログアのひとつである『ジュエルシード』を取り込んだ生き物をとらえ損ねてしまった。

くそ・・・なんで僕はっかりこんな目に・・・誰かに手伝ってもらわない限り無理だったの。

ハッ！いけない。ユーノ・スクライア、落ち着け。今このような

状況を産み出した老人方に対する罵詈雑言を並べ立てたところで僕は救われないぞ！

でも、手伝ってくれる人が必要なのは確かだ。

「・・・だれか・・・この声を・・・」

僕は必死に訴えた。まだ顔も見ぬ、相棒の存在を信じて・・・。

「だれか、僕と契約して魔法しようじ・・・ゲボハアツ！」

side out――

sideなのは

「ここからだと近道なんだ」

アリサがそういうのなら事実なのだろう。

私とすずかはアリサの後ろに続いた。辺りは薄暗くなり始めている。

「なのはちゃん・・・なんか、不気味だね」

「心配ない。ただの木だ」

「なのはちゃん、怖くないの？」

「私は義によってたっているからな！」

「意味わからないよ・・・」

と、ここまで他愛もない会話を交わしていた。

しかしその時、私の頭へ何者かが直接言葉を訴えていた。

「声・・・？」

どうやらこの声は私にしか聞こえていないらしい。二人は呆けたような顔をしている。

「なのは・・・？」

アリサが声を掛けてきたが私はそれに答えなかった。

何故ならば私はその時すでに走り始めていたからだ。

二人の呼ぶ声を背中に聞きながら、私は沸き上がる激情に身を委ねていた。

暫く走っていると、一匹の動物の横腹を盛大に蹴ってしまった。

(デボハアッ！)

「しまった！」

私は急いでその動物のもとへ駆け寄る。

「これは・・・淫獣フェレットか？」

その淫獣は首に赤い宝石をつけていた。

「なのはー！」

「なのはちゃーん」

私に置いていかれていた二人も追い付いた。

「二人とも、見ろ」

息を半分切らしている二人に先程横腹を蹴ってしまった生き物を見せた。

「あれ？これ淫獣フェレットじゃない？」

「本当だあ。捨てられたのかな？横っ腹怪我してるみたい」

まさか「私が蹴りを入れた」なんて言えるはずがない。淫獣フェレット処置は二人に任せることとした。

side 淫獣

何なんだよオオオオオオオ！

こいつらなんで普通にフェレットって言わねえんだよ！

あげくのはてには獣医さんにも言われたよ！

「んー(；>|<；)これホントに淫獣フェレット？それにしても誰かしらね、横っ腹を蹴るなんて酷いことしたのは」

僕を淫獣って表記するのは残酷じゃないのかよ！

それに僕を蹴り飛ばした奴。あつ。目が合ったらアイツ目をそらしたぞ！？

・・・それにしても、このサムライオーラ全開の女の子が僕のパートナーとなる？

なんてこった。

僕は心のなかで偉大なる聖王女オリヴィエに祈った。

どうか生きて最終回を迎えられますように・・・。

side out
続く

第三話 ソロモンの悪夢なの（前書き）

結局いつもの文体に戻りつつある今日この頃。

第三話 ソロモンの悪夢なの

淫獣^{ユール}は現在腹に包帯を巻いた状態で動物病院のケージのなかにいる。

「くっそう・・・治癒魔法使ってるのにまだ痛いよ、もう」

そんな感じで文句をブツブツ呟いていると外に気配を感じた。

『!?!?・・・これは・・・』

少し痛む身体を動かし窓の外が覗ける位置へ移動する。

外には月明かりに照らされたあのジュエルシードのめちゃもちや（どう表現してイイかわかんないんだもん）が蠢いていた。

淫獣^{ユール}はすぐさま数時間前に会ったおっかない少女へ念話を飛ばした。

『聞こえますか・・・貴方の力が必要です・・・』

「なんとっ!?!?」

なのはは驚きの声を上げた。

「この声は・・・先の淫獣^{フェレット}か・・・?」

なのは――いや、アナベル・ガトーという男は困っている人を無視できない性格なのだ。

なのはは淫獣^{フェレット}の抗議の声を完全に無視して家をこっそりと、迅速に抜け出した。

淫獣^{ユール}は電柱の陰に隠れながらジュエルシードのアレを観察していた。

そこへ例の少女がやって来る。

「やあ!半分は嘘になるけど待ってたよ!」

「やはり君か。何なのだあの生物は?」

淫獣ヘルビつけんのめんどくさくなっちゃったは少女（なんだか“少佐”の方が似合う気がするのは気のせい?よし、今から少佐

だ。」にジュエルシードについて軽く説明した。

少佐は心得たのか頷く。

「よしわかった。つまり、私とそのジュエルシードの回収を手伝え
ばいいわけだな？」

淫獣はイエスの返事をして、快く引き受けてくれた少佐に赤い宝
石を渡した。

「？何だこれは」

「これは“レイジング・ハート”。いわゆる魔法の杖みたいなもの
さ」

「ふむ、これはアレか？呪文を唱えるのか」

淫獣は予想以上に飲み込みの早い少佐に感激する。

「そう！君は僕の言うことをそのまま繰り返して！」

なのはが言われた通りに呪文を繰り返すと、全身をまばゆいばか
りの光が包み込んだ。

「何っ！？」

光に包まれたのもつかの間。一刹那後には光が解け、そこには先
程までとは違う服を着たなのはが立っていた。

基本デザインはなのはが通っている小学校の制服をイメージした
ものとなっている。どうやら、この服装には本人のイメージが反映
されるらしい。

しかし、なのはが目をつけたのはそこではない。

なんと、その服のカラーリングパターンが嘗ての自分が使用して
いた「ゲルググ」のカラーリングそのものだったのである！

「おお！まるで、ジオンの精神が形となったようだ！」

淫獣は頭の上に「？」を浮かべていたが、知ったことではない。

「淫獣君！」

「せめてルビはつけてくれ！で、なに？」

「武器の形状は変えられないのか？」

「んー、レイジング・ハートに聞いてみてくれ。それには人工知能

が搭載されているんだ」

面白い。なのははそう思い、レイジング・ハートに問いかけようとした。すると・・・。

《・・・ガトーよ》

「ハッ!? デラーズ閣下!?!」

後ろで淫獣が「あつれえ!? こんな声だっけ!?!」と戸惑いの声をあげている。それをやはり無視してなのはは丁寧に関かけた。

「デラーズ閣下、貴方の形状は変えることができるのでしょうか?」

《できる。貴公は、儂がそのようなことも出来ぬ老人だと思うか?》

「いえ! 滅相もございません、閣下」

なのははがそう言うのとデラーズ・ハート（勝手に命名）はなのはの要求した形、ゲルググ用のビームライフルへと変形した。

《行け、ガトーよ!》

デラーズ・ハートの激励の言葉で久々に戦士の魂を奮い立たせたなのはは——アナベル・ガトーはジュエルシードのアレの前へと飛び出した。

淫獣^{ユウ}には何が起きたか理解できなかった。ただ、言えることはその少女——高町なのははとんでもなく強く、とんでもなく“漢”だと言うことだ。

なのははジュエルシードのアレの前へ飛び出した後、十数メートルの高さへ跳ねた。

「南無三!」

なのはがビームライフルの引き金を引く。銃口から放たれた魔力粒子の塊は見事にジュエルシードのアレの肉体を抉った。

「グオアアアア!」

ジュエルシ（以下略）は一応痛覚らしいものはあるようで、痛みによる咆哮を上げた後その変態的触手を数本なのはに放った。

「遅おい!」

しかし、9歳とはいえ伊達にソロモンの悪夢ではなく、嘗ての勘

を取り戻した彼女はそれらを全て避けきった。

落下に身を任せながら正確にビームライフルを連射する。

ビビュウン！バビュウン！

「アアアアアアア・・・！」

ジュエ（以下略）はビームに串刺しにされた挙げ句、断末魔の叫びを冷たい夜の空気に残して消滅した。

「す、すごい・・・」

「この蒼い宝石を封印するのだな？」

なのはの見た目に似合わない華麗な戦いぶりに声もでなかった淫獣だがなのはに問いかけられてハツとした。

「う、うん！そうだよ」

「そうか。では、閣下、お願い致します」

《ウム》

なのははデラーズ・ハート扮するビームライフルの銃口をジュエルシード（本体）へと向けた。

「ジュエルシード、封印！」

なのはがそう唱えるとジュエルシードは蒼い光となってビームライフルの銃口へと吸い込まれていった。非常にシニールである。

《ガトー、見事であった》

「ありがとうございます、閣下」

その後、遠くからパトカーによるサイレンの音が聞こえてきたため、ズツタズタになった道路や誰かの家の塀を残して一人と一匹と一機はその場から逃走した。

続く・・・

第三話 ソロモンの悪夢なの（後書き）

次回予告

なのはは学校で友達のアリサ、すずか、はやてに淫獣について問い詰められ、ついには淫獣の正体を吐いてしまう。

それを立ち聞きしていた担任の先生は悪魔の計画を実行に移すのだった・・・。

次回、「光る宇宙」君は、鵠の涙を見る

caution!これはほぼ嘘予告です。正確な部分は二行目21字目までだけです。

第四話 淫獣との同居生活が始まるの

私立聖祥大附属小学校。そこが高町なのはの通う学校である。

「おはよう！」

なのはは今朝も漢気溢れる挨拶を教室内に響かせた。

「おはよう、なのは」「なのはちゃん、おはよう」「おはよう、少佐」

その挨拶に友人の三人が返事をくれた。

一人はアリサ・バニングス。通称『釘宮小隊』。もう一人は月村すずか。物静かだが、言うときは言う地味に頼れる少女。もう一人は八神はやて。関西弁が特徴の車椅子少女へ因みに彼女は何故かなのはを少佐と呼ぶ。なのははそれをとっても気に入っている」。

「少佐、昨日淫獣ひろたんやて？」

予想通り、その事について聞かれた。はやては昨日は病院に行っていたため、帰りは一緒ではなかったのだ。

「ああ、確かに淫獣を拾った。動物病院送りだったがな」

「ね、ね、なのはちゃん、あの後、淫獣の様子見に行ったりした？」
なのはははずかの質問にドキリとした。

——まさか、見られていたのか！？

が、どうやらそれは杞憂だったようで、彼女は純粹に淫獣のことが気になっているだけのようだ。

「ま、まあ、そうだ・・・」

まさか「その淫獣から魔法の力を授けられて変な生き物とドンパチやりました」と言うわけにもいかない。

と、言うわけでそこは事実を織り混ぜた嘘で誤魔化した。

「よかったじゃん！」

基本的に疑り深いアリサも信じてくれたようだ。

「しかし、問題は家に帰ってからだった・・・」

先のは基本嘘だったが、これから話すことは事実である。

~~~~~

なのはが家に帰ったのは結局十一時ちょい前であった。

このまま堂々と玄関から帰宅したらお父さんのお仕置きデストロイヤーを食らうこと必須だったため、屋根を上って二階の窓から屋内へ入ることにした。

なのはは気配を消して玄関前を横切ろうとした。その時！

「・・・何をしている」

なのはは急速に身体を捻り、身を構えた。伊達に前世は軍人ではない。

しかし、そこにいたのは別に不審者でも何でもないなのはの実兄、高町恭也であった。

彼の手には何やらスイッチ的なものが握られている。

「どこに行っていた。言わないとお前を殺す」

実は高町恭也は去年の暮れに近所の暴走三輪車に轢かれてそれ以来「非異炉病<sup>ヒイロ</sup>」という未知の病に侵されているのだ。この非異炉病、怒ったりすると自分には自爆装置が組み込まれていると思い込んでしまう世にも恐ろしい病気なのだ。

「お前を・・・・・・・・・殺す」

「なにしてんの？」

そこへ姉の美由紀が襲来する。

「あっ！なのはー！お父さん心配しすぎて鼻からコーラ飲んでたよ！」

鼻からコーラを！？これは一大事である。美由紀姉もどうやらご立腹のようだ。

しょうがない、と、漢なのはは覚悟を決める。

「ねーねー、お姉ちゃん、この淫獣家<sup>フェレット</sup>においてあげていいでしょー？」

今だけ赦される禁断の奥義、だっ子、である。

この奥義は自分に降りかかる災難を回避する代わりに精神的ダメージを受けるという諸刃の刃である。

(く、屈辱・・・！)

が、どうやらこの奥義は功を成したらしい。

「あら！可愛い淫獣ねー」

美由紀姉は可愛いものに弱いのだ。

「もう、しょうがないわねー。父さんと母さんには私から言つとくわよ」

なのはは心のなかで歓喜の声をあげる。

「お前を・・・・・・・・・・・・・・・・・・殺す」

「兄さん黙ろうか。潰すよ」

「・・・・・・・・・・」

~~~~~

「えっ？じゃあ拾った淫獣は少佐ん家で飼うことになったんか！？」

「まあ、そういうことだな」

アリサとすずかもオオー、と驚きの声をあげている。

「それにしても淫獣飼うの、おばさんともかく、おじさんが許すなんて意外ね」

それに関しては簡単である。

一応のところ父、士郎が大黒柱として家計を支え、家族を守っているわけだが、時折その力を母桃子が凌駕するのだ。

その時は士郎が鼻からコーラを飲むという暴挙に出ていたため、まさしくスーパー桃子タイムだったと言えるよう。

「スーパー桃子タイムの間は母が白と言えば黒でも白になるのだ」

「なのはの家族ってすごいね・・・」

アリサがなんとも言えない顔でそう評価した。

~~~~~

その週の休日、アリサ、すずか、はやては高町なのはの住みかである喫茶店「翠屋」に集まっていた。目的はもちろん、高町家の扶養家族となった淫獣フェレットユウを見ることがである。

「これが例の淫獣の淫獣だ」

ユーノはなんとも言えない顔をしていた。

彼はなのはと同年代の少年だ。こんな美少女達にもみくちゃにされるなどもっと喜んでイイはずだ。第一、この世界に淫獣じゃない男なんているかい？

それでもユーノの顔は晴れなかった。その原因は彼をいじりまくる少女達である。

「淫獣君カワイー！」 「淫獣くーん！」 「淫獣の淫獣かあ。エエ名前やなあ」

やっぱりお前らもかよ。僕を淫獣と呼ぶのかよ。

いや、わかってるよ？ 「淫獣」と書いて「フェレット」もしくは「ユーノ」と呼ぶことぐらい。わかってるさ。でも、やっぱり凹むよ。

何だよ、「淫獣の淫獣かあ」って。意味わかんねーよ。淫獣の二乗かよ。これに位はルビつけろよ作者アアア！

そんなこと思いつつも今の状況を満喫している淫獣君<sup>ユーノ</sup>。

次回からはユーノ<sup>淫獣</sup>と表示してやろうと決意する作者であった。

続く

#### 第四話 淫獣との同居生活が始まるの（後書き）

次回、早くもあのパツキンさんが登場！

合言葉は

「ニンジン、いらないよお・・・わぁー☆」

感想、ご意見、お待ちしております。

## 第五話 ジュエルシード強奪なの（前書き）

べつに強奪する訳じゃ無いけどね。

## 第五話 ジュエルシード強奪なの

ユーノは夢を見ていた。

——ユーノ。

「ハッ！その神秘的なオッドアイ！聖王女オリヴィエ殿下！てか、文章のなかで僕が普通に名前で呼ばれている！」

——そうよ。貴方は今回からたまにしか淫獣呼ばわりされないのよ。

「たまには言われるのかよ。それにしても、それはまた何故・・・？」

——この小説の感想でこの淫獣というフレーズはたまに使うから面白味が増すのでは、という意見が書き込まれていてね、作者が「確かに」と思ったわけなのよ。

「なんというメタ発言」

——それにいちいちルビついたりするのもしんどいしね。

「これはまたとんでもないメタ発言だ！」

——因みにこの件は問題があったりしたら自動的に消されるわよ。ほら、起きなさいユーノ。なのはちゃんが呼んでるわよ・・・。

『ユーノ、ほら、起きろ』

なのははバスのなかで念話によってユーノを夢の園から引きずり出そうとしていた。

『んん、なのは・・・』

『もうすぐ目的地だ』

見た目は美少女、中身はアナベルな彼女は友人の月村すずか宅にお茶のお誘いを受けているのだ。今はその移動中である。

「なのは、やっぱりお茶のお誘いは嬉しいか？」

今回のお出掛けはなのはとユーノだけでなく、兄の恭也も一緒だ。恭也とすずかの姉、忍はとってもイイ仲なのである。



「私の心は今の海鳴のように震えている」

「ハハハ。そいつはよかった」

なのはの中身、つまり、アナベル・ガトーはお茶会なぞ興味のひともわかないのだが、女の子という肉体に刻み込まれた女の子の部分がそのような洒落なものを求めているのだ。

『何故少女はこのようなことをやりたがるのだろうか』  
なのはは何時もそう思っていた。

月村邸は豪邸である。すずかは町の喫茶店の娘とは歴然とした差があるお嬢様だ。

その庭園の一角にあるテーブルになのはを含め四人少女が座っていた。

ユーノは彼女等の足下で猫と遊んでいる・・・ように見える。

「あゝあゝ、すずかちゃんは猫、アリサちゃんは犬、んで少佐はフエレットかあ。エエなあ。動物」

はやては両親に先立たれ独り暮らしなため非常に孤独だ。しかも体が不自由なため、その代償行為として動物の存在を欲していた。

しかし、作者は言う。心配するな。じきに四人のお母さんとなる。四人はしばらくペット談義で盛り上がったが、なのはにそれを中座せざるを得ない状況が発生する。

《ガトーよ》

デラーズ・ハートからの呼び掛けになのはは応じる。

『どうされましたか？』

《近くにジュエルシードの反応がある》

『なんと!？』

なのははハッとユーノを見た。彼も気づいているらしく、少し頷くとユーノは猛スピードで駆け出した。

「あれ? ユーノどうしたの?」

「あっ、ユーノは散歩にいきたいそうだ。御免!」

なのははユーノを追って駆け出した。

近くの森の中、一人の金髪少女が木の上に腰かけていた。

『フェイト、一人で大丈夫？』

彼女の脳内には優しい相棒の声が響いている。

「大丈夫だよ、アルフ」

フェイトと呼ばれた少女は自らの手にあるデバイスを見つめた。

「それよりもアルフ、バルディッシュの新しい身体はスゴいよ。前のやつと比べるとパワーも桁違いだし、エネルギー伝達システムも5%速度が上がってる！変形機構もシンプルかつ多彩になって他にも――」

『はいはい！分かったからジュエルシールド早いところ回収しちゃう！』

フェイトはうん、と返事をしてデバイスを起動させた。

そのころ、なのはとユーノは驚きの光景を目の当たりにしていた。かつてはソロモンの悪夢と恐れられた前世を持つ彼女も驚きを隠せないことはある。

二人の前には超がつくほどでっかい猫がいたのだ。

「ユーノよ。あの猫は何故あんなにでかいのだ！？」

「きつとあの猫が『BIGになりてえ』と願ったんだろうねえ」

理由がわかったところでなのははデラーズ・ハートを起動する。

「ジーク・ジオン！」

そう唱えると、彼女は一瞬の後、ガトール専用ゲルググのカラーリングのバリアジャケットにビームライフルという出で立ちとなった。なのはは木の影からビームライフルの照準をBIG猫に合わせ、引き金を引く。

銃口から伸びた数本のビームはBIG猫の身体の様々な場所に当たり、見た目に似合わず可愛らしい声をたてながらBIG猫は昏倒した。

「ふん、鎧袖一触とはこの事か・・・」

猫はジュエルシードと分裂し、起き上がったかと思うと猛スピードで逃げていった。

ビームライフルの銃口をジュエルシードに向ける。

「このジュエルシードはいただいて行く！」

《封☆印》

ジュエルシードは蒼い光となってデラーズ・ハートに吸い込まれていった。

「これで、よし……ッ!？」

安堵の吐息を漏らそうとした瞬間、なのはは近くに気配を感じた。気配の根源はなのはの近くの木の上からだ。

「……何者だ!？」

金髪の少女はなのはの十数メートル先に降り立った。

「貴方にジュエルシードを渡すわけにはいかない！」

金髪少女――フェイト・テストアロツサはサイスモードのバルディッシュを構えた。

「ふむ、意気込みはよし。だが、相手が子供ではな」

お前も子供だろ!？、とユーノは近くの茂みでそう思ったが、口には出さなかった。何故か出してはいけない気がする。

「であっ!」

フェイトは小さな気合いの声ともなのはに切りかかった。彼女の攻撃は速く、正確であった。しかし、なのはにそれをかわされる。

「!？」

どこへ行った? 戦闘中に敵を見失うのはあってはならないことであるが、フェイトはそれをおかしてしまった。

首を素早く巡らしていると背中を強烈な衝撃が襲う。

「かはっ……」

なのはのシールドアタックは結構効いたようで、軽く数メートル吹き飛んだフェイトは地面に叩きつけられた。

「く、く……」

背中をこらえながらフェイトは立ち上がる。が、しかし。

「！」

彼女が顔をあげたとき、喉元になのはのビームナギナタの切っ先が立てられた。

「私と闘うには君はまだ、未熟・・・！」

なのははそう言うのとビームナギナタを納め、空へ飛び上がった。

「未熟だとお！」

森の中にフェイトの悔しさによる叫びが木霊した。

この闘いはなのはとフェイト、初めての邂逅として二人の記憶に深く刻み込まれることとなる。

因みにユーノ君はなのはが飛んだため、少し走るはめになりました。  
たとき。

## 第五話 ジュエルシード強奪なの（後書き）

先頭シーンをもっとうまくかけるようになりたい。

しかもラストなんかフェイトさんが主役っぽいし。まあ、主役であることに間違いはないのだけれども。

## 第六話 熱湯の攻防なの（前書き）

文の組み立てがうまくできない。

## 第六話 熱湯の攻防なの

翠屋は年中無休が売りな訳だが、たまに店をバイトさんや店員さんに任せて家族総出でお出掛けしたりする。

そして、今回は高町家の面々以外にアリサや月村家の人々、はやて（車椅子は折り畳んで後ろさね）といった面子も揃った非常に賑やかなものである。

『温泉か・・・』

なのはもガトー時代に一度聞いたことはある。

なんでも、この世のものとは思えないほどキモチイとか。

実はなのはは昔一度温泉には来ているのだが、昔のこととして忘却の海へ沈めているのだ。

その温泉は海鳴市の山手の方にあり、知る人ぞ知る隠れた名所だ。本当、海鳴市にはなんでもあるな。

前世がコロニー育ちのなのはにとってはやはり天然の森林というものには心引かれるものがある。

「閣下、これが地球の森林です」

《うむ、やはりコロニーのものとは違い活力に満ちておる》

かつてはコロニー落としを画策した二人であるが、このような景色に触れるとそれが真に正しいものだったかどうか揺らいでくる。

『しかし、スペースノイドの真の解放には必要だったのだ・・・』

「なのは、どうしたの？」

長考の埒埒入りかけていたなのはをアリサが引きずり出す。

「おお、アリサ」

「早速温泉に入ろうよ」

見ると、アリサ、すずか、はやての手にはどこから取り出したか風呂桶とタオルがあった。

なのはは短く返事をして彼女たちのもとへ向かった。

ユーノ・スクライアは窮地に立たされていた。

「む？ユーノ、君も入るのだ」

「なのは、その・・・僕は一応男だからさ、士郎さんたちのいる男湯に・・・」

「何を照れているのだ？」

なのははユーノの首根っこを掴んで背を向けていた身体を正面に向けた。

ユーノの視界に肌色が広がる。

「グハアッ！」

「よくわからんな・・・」

なのはは苦笑する。

因みに見た目は美少女、中身はアナベルなこの人が女湯に入っても平気なのには理由がある。

アナベル・ガトーは御年25歳の青年であった。その為、本人が意識せずとも体が反応してしまった。

しかし、今はアナベル・ガトーではなく、高町なのはという女性の体を持つため、女性にたいして全くもって反応しないのだ。

少し前までは多少の躊躇はあったが、慣れた。

そのようなことを微塵も知らないユーノは最後の抵抗として丁寧に畳まれた衣服の上に鎮座しているデラーズ・ハートに助けを求める眼差しを向けた。

《・・・行け！ユーノよ！》

だが、あっさり突き放された。

「何をしている！速くしないと皆に迷惑がかかるだろう！」

「嫌だ・・・ここで抵抗をやめると大切なものを失いそうな気がする」

「はあ。貴様、淫獣ユーノの風上にもおけんな」

「置かれたくなんてねえよ！・・・あっ！ちよ」

結局、ユーノの奮闘むなしく彼はなのはに首根っこを掴まれ女性性が群がる湯船（動物でもOKらしい）に強制投入されたのだった。



数十分後――

久々に長湯をした少女四人組はイイお湯だったねー、とありふれたことを話ながら廊下を歩いていた。

「ん？ユーノ君顔真っ赤やけど・・・」

「ほんとだ。毛が生えてても逆上せると赤くなるんだね」

彼女達はもちろん何故彼が赤いのかなぞ知らない。

氷でも当ててやろうか、なんて話していると向こうからいわゆるナイスバデーな女性がハイテンションで歩いてきた。

「ハアイ、オチビちゃん達」

女性は四人のことを品定めするような目付きでじっとりと眺めた。アリサが嫌悪を示す。

女性の視線はなのはのところで止まった、が、一瞬ニヤリと笑ったら「なんでもないわ」と再び歩みだした。

そして、すれ違いざま、なのはの頭に直接声が響いた。

『君？ウチのフェイトを打ち負かしてくれちゃったのは』

『何？』

なのはが振り向くと女性が先程と同じような笑いを顔に浮かべながらこちらを見ていた。

『ン、そんなに強そうでも、賢そうでも無いけどね・・・とにかく、お嬢ちゃんはお家で寝てるべきだよ』

そう言うと、女性は踵を返して去っていった。

『見たところ何でもないただのチビスケだったけどねえ。フェイト、ホントにあいつにやられたのかい？』

女性はなのは達の入った風呂に入って自分が仕える少女と念話で会話をしていた。

『ホントだよ。だから今勝つためにバルディッシュの調節してるんだ』

『調節・・・？』

『うん。“バルディツシュ・ゼフィランサス”は主に地上戦向きの機構だから空間戦闘にはどちらかと言えば不向きなんだ。今まで空を飛ぶ奴がいたわけでもないからね。直ぐには換装できないから応急措置として重力制御率を3%下げて、推進率を20%上昇・・・』

『あー！もうわかったからさ！ジュエルシードは見つかった？』

女性は機械についてはからきしダメなのだ。

『反応はあるんだけど、場所がよくわからなくて・・・』

『よし！私も風呂から上がったら手伝ったげるよ！』

女性の頼れる宣言に少女は感謝の言葉を述べた。

「では、我々は先に失礼する」

恭也はどうやら子供たちには早く寝てもらいたいと思っているらしい。忍とイイ雰囲気だ。

四人は電気を消し、一斉に布団に入って一斉に眠りの女神に身を任せた。

《  
・  
・  
・  
ガトーよ  
》

寝ぼけ眼で時計を見ると時刻は午前0時12分、となっていて、寝たのが10時少し過ぎだったことからおよそ2時間寝ていたよう  
だ。

33

ルギーを節約していたため元気ハツラツウなユーノの姿を捉えた。

《夜分遅くすまん。ジュエルシードの反応だ》

こくりと頷いたなのは得意の早着替いで浴衣から普段着に着替えたあと外へ静に、素早く飛び出し、デラーズ・ハートの導きに従い走っていった。

そのころ、フェイトはジュエルシードの所在をつかみ、そこに向かっていた。

「あの子は来るか・・・」

そのようなことが頭の中をよぎっていった。

ジュエルシード自体は蒼く光っているため簡単に見つけられる。

フェイトはその光を小川に架かる小さな橋の近くの茂みのなかに見出だした。

先日の少女はまだ来ていないらしい。

フェイトは早速バルディッシュの切っ先をジュエルシードに向け封印の作業を始めようとした。と、その時。

いきなり数条のビームが彼女の足元をえぐったのだ。

フェイトはバルディッシュに戦闘形態をとらせ、後退する。

ビームの飛来した方向を見るとそこには先日の少女——高町なのはが立っていた。丁度橋を挟んだ位置である。

「また貴様か！一度ならず、二度までも！」

そう言うとなのははライフルをナギナタに変形させた。こちらの戦闘スタイルに合わせてくれるようだ。

『アルフ、ジュエルシードをお願い』

『えっ？フェイトは』

『私はあの子を引き付ける！』

フェイトはバルディッシュを振りかざし、なのはへ斬りかかる！

「遅い！」

なのははいつかのようにフェイトの斬撃をかわす。

その時、なのはは空中にいた。

「そこだ！」

フェイトの短い確信の声と共になのはに向かって黄色い光弾を連発する。

「落ちろオオオオ！」

空中だと身動きはまともにとれない、と踏んでの行動だったが、避けられてしまう。

「ダニィ！？」

なのははバランスを崩すことなく着地し、一気に踏み込んできた。

「でああああッ！」

「のああ！」

鋭いスパーク音と共に激しいつばぜり合いとなった。

なのはの斬撃は重く、バルディッシュの機体も軋んだ。

しかし、バルディッシュよりも先にフェイトに限界が訪れる。

そこに踏みとどまっていることが困難となって吹き飛ばされたのだ。

「あああ！」

今回は変に姿勢を保とうとしたせいで地面と望まぬ接吻をするはめとなった。

「ぶちゅうッ！？」

口に入った砂利を吐き出し、起き上がろうとしたところ、地面にまた叩きつけられた。

視線を動かすと、月光に照らされた逆光で全身真っ黒のなのはが倒れるフェイトの上で仁王立ちしていた。

「貴様はまだ未熟だと言った！」

「でも、私はジュエルシールドを手に入れなければならない。あなたを倒さないといけない！」

「貴様に私は倒せん！」

『フェイト！』

！

フェイトの脳内にアルフの声が響き渡った。ジュエルシールドを回

収したらしい。

これと同時になのはにもユーノから念話が届いていた。

『なのは！ごめん！彼女の使い魔にジュエルシードを持ってかれた！』

「何！？」

なのはが驚きの声をあげる。

それは一瞬のことであったが、フェイトにとっては十分な時間だった。

フェイトはなのはの束縛から逃れる。

「！？」

「次こそは負けない！必ずあなたを倒して見せる！」

それはフェイトからの宣戦布告であった。

飛び去るフェイトの姿をなのはは無言で見送るのだった。

続くの！

## 第六話 熱湯の攻防なの（後書き）

感想お待ちしております。

## 第七話 時空の管理局なの！（前書き）

いい忘れてましたが、この小説は話の流れが原作とやや違ったりしますが、気にしないでください。

## 第七話 時空の管理局なの！

時の庭園――

「今まで集めた分が3つ、今回で4つ・・・」

ビシッバシッと叩く音が響き渡る。

彼女はプレシア・テストロッサ。フェイトの実母である。

「少ないわ・・・」

ビシッ！バシッ！

幾度となく叩き、満足したところで叩くのを止めた。

そして

彼女は

叩いていた物を溶き卵につけ、パン粉をまぶし、高温の油でさくつと揚げた。

「フェイトオオ！今日のごはんはトンカツだYO！」

そう、彼女は愛する娘フェイトが頑張れるようにスタミナをつくトンカツを作っていたのだ。

「ダニィ！？トンカツだとおく！？」

フェイトが喜びと驚きの声と共に駆けてくる。

「あら？アルフは？」

「もうすぐ来ると思うよ」

フェイトの予告通り、アルフは直ぐにやって来た。

「肉☆」

「ホラ、早く席について。トンカツが冷めちゃうわよ」

ウハウハでフェイトとアルフ（人型）が席に着く。

しかし・・・フェイトは皿の上にあってはならない物を見つけ  
てしまう。

「・・・！ニンジンはいらないよ・・・」

「なに言ってるのフェイト。ニンジンは目にイイのよ。食べなきゃ」

「・・・アアやっぱ無理！それになんか食べたらダメな気がする」



「キャロット野郎！お前がナンバーワンだ！」

「またそうやって・・・あー！でもかわいい。他の野菜を食べるこ  
とで許す」

フェイトの顔が明るく輝いた。ニンジンとブロッコリー以外なら何でも食べられるのだ。

「そう言えばフェイト、プレシアに言いたいことがあったんじゃないの？」

トンカツをパクついていたフェイトは「ほーばっば！」と謎の言語で返事をし、PRESIAがフェイトのために叩きに叩いたためとても柔らかくなった豚肉を十分に咀嚼して飲み下したあと急にかしこまった。

「お母様」

「あら、どうしたの？ 椅子の上で正座なんかしちゃって」

「実は、バルディッシュをもう一度カスタマイズしてほしいんだ」  
そう言うと、プレシアはちよつと思議そうな顔をする。

「ゼフィランサスで何か問題でも起きたの？」

フエイトはかぶりを振った。

「違う違う。実は私ね、なんか妙に強い女の子に負けちゃって」

フェイトがそこまで言った、その時！プレシアがガタツと椅子から立ち上がった。

「誰! ? その子! ? 家の娘になにさらしたんじやアアアア! 」

「ちよ、母さん落ち着いて！」

[illegible]

「母さんッ！！」

「ハッ!？」

プレシアは逆立てていた髪を下ろし、汗だくでフェイトを見やっ  
た。

「ご、ごめんフェイト。つい……」

「もう。確りしてよ。アルフもビビってるよ」

「で、その女の子に負けて——」

「落ちつけえ！」

母の飲み込みのよさにフエイトは嬉しくなる。

「いいかな?」

するとプレシアはどこからともなく設計図らしき物を取り出し机に広げた。

「母さん、これ何？」

はつきり言ってアルフはそのようなことに興味がない、というか

解らなかつた。

「エネルギー制御率が三割増し!？」

ことでパフォーマンスが――」

もそも書いてる本人にも理解できないよ (by 作者)

そのころ、我らが少佐殿こと高町なのははというと、晩御飯を終

え、宿題の国語と格闘していた。

「解せぬ！」

『なのは……』

《ガトー……》

ユーノとデラーズ・ハートが見守るなか、なのははボロボロになりながら宿題の問題という名の敵を次々と打ち倒していった。

そして、激闘の果てについて全ての敵を倒した。

「はぁ、はぁ、私の心は（以下略）」

『やったね！なのは』

《よくやったガトーよ。ところで、終わって早々だが貴公に伝言がある》

なのはが「なんと？」と返事をする、デラーズ・ハートは伝言を再生する。

《こんにちわ。私はテストロッサ家次女、フェイト・テストロッサだ。明日午前5時より貴方に決闘を申し込む。私が勝ったら、貴方の持つジュエルシードを全て貰う！覚悟しやがれ、今回の私はひと――》

「貴様の話を聞く耳など持たぬ！」

なのはは伝言を強制終了し、消去した。

『でー！聞いてやれよ！』

「とにかく、明日の5時か。今日は早めに寝よう」

《……挑戦に、乗るのか？》

「はい。いくら子供とは言え（ユーノは心のなかで突っ込んだ）意気込みは買ってやりませんとな」

《貴公らしい答えよ》

そういったデラーズ・ハートになのはは返事しようとしたが、眠気がそれに勝り、ついあくびが出てしまった。

「申し訳ありません」

《構わぬ。今日はもう休め》

なのはは言葉に甘えることにした。

翌日――・・・

フェイト・テストロッサの指定した場所は海鳴の臨海公園だった。なのはとユーノは時間丁度に訪れる。すると、まだ灯ったままの街頭の上に金髪の少女がたっていた。

格好は以前と違い――と言うより全然違う。黒以外バルディッシュの面影はない。完全にどこぞのフルバーニアンである。

紫だちたる雲に映える金髪は超野菜人を彷彿させた。

「貴様の言う通り来たぞ」

「ふん！この私に倒されにきたか。下級戦士め！」

ユーノは「この子キャラクターが定まってないな」とその時考えた。

戦闘は自然な成り行きで始まった。

この高町なのははO★HA★NA★SHI する気など微塵もないのだ。

初めは海上でのビームライフルの撃ち合いとなった。

因みになのはは背中に魔法のロケットブースター（突っ込んだら負け）を取り付けているため空中戦もこなせる。

「ほお！？貴様、前より動きが良くなったな！」

なのはは純粹にフェイトを誉め称える。

「だが、まだ性能に頼っている！」

なのはの放ったビームはそのまま行けばフェイトに命中していたが、フェイトは背中中のフレキシブルブースター（勝手に命名）を駆使して見事に避けた。

「今日こそ決着を着ける！母さんのため！アルフのため！そして・・・」

「なんだ！？」

「アリシアのため！」

フェイトはシールドを展開し、サーベルを抜いた。黄金色のビーム刃がまぶしい。

そして、二人は一斉に間を詰め、ビームの刃を交差させた。

私情を闘いに持ち込むか！確かに闘いは怨恨や私情から始まる。

「ダニイ!？」

二人はバシッと火花を散らせ、再び距離を取った。

「又オオオオオオオオオオオオ!!!」

二人が激しくぶつかろうとした、その時……！

えらくWAKAMOTO 口調な少年が二人の動きを間には言っ

「なんと!？」

なのはとフエイトは呆氣に取られる。

「じ、時空管理局……！」

「……！貴様！何処へ行く！？」

そう言い終わった頃にはフェイトの姿は見えなくなっていた。

44

らきやがーれーい。そのフェレットモードーキーもだーよ」

なのは手に軽いバインドがかけられた。

「あ、それから、俺のことを『空気読めない』とかあ『若本病』とかあ『お前キャラだろ？ 中のひと的な意味で』とか言ったら腹ア切らせッから覚悟しーやーがーれーよお」

続くの！

## 第七話 時空の管理局なの！（後書き）

さーて、次回のなのはちゃんはー？

ンンン、クロノ・ハラオウンだあ。次回はあ、ンンなんだっけえ？

ーダニイ！？

ン、フェイトかあ。どうした、笑えよ、フェイト。

ー（嘲笑）

ンンンンンンンン！ぶるあああああ！

どっかーん。

## 第八話 アースラなの（前書き）

どうやら後に登場する人物の方が暴走が激しくなる傾向があるよう  
だ。

あと、オマケがあります。



## 第八話 アースラなの

次元航行艦『アーガマ』じゃなくて『アースラ』は新たな客人を迎えて次元空間に浮かんでいた。

「ンンン！オラ、テメー等、こっちきやがーれい」

なのはとユーノは今、そのアースラ艦内をえらく若本な少年に案内されながら歩いていた。

宇宙戦艦には乗ったことはあるが、次元航行艦などに乗ったことは勿論無い。なのはは少しでも情報を得るため目だけを動かして周りを観察している。

そんなとき、なのはの視界に1つの物体が現れた。

それは物語の中の王子様やお姫さまが結ばれる原因となる『一目惚れ』に似た症状としてなのはの心をガッチリ掴んで放さなかった。

「・・・？なのは、どうしたの？」

彼女の肩に乗っていたユーノは不審そうになのはに聞いた。

「ユーノ・・・」

「えっ？」

「あそこを見ろ」

ユーノはなのはの指差す方へ顔を向ける。

そこには大量の段ボールが積まれていた。

「あれが、どうかしたのかい？」

「私はあれに入りたい・・・」

「・・・ハッ？」

すると突如、なのはは興奮のあまり叫び始めた。毛細血管が切れたのか目が赤くなっている。

「何故かわからないが段ボールに私は強烈に惹かれている！あのかくばったボディ！地味なカーキ色！淡い色で書かれた商品名！そして、なんとも言えない独特のこの臭い！そのすべてが私の心を揺さぶっている！」

なのはは、突然の事態に驚きを隠せないユーノを他所にクロノへお願いする。

「ハラオウン執務官！この艦内にいる間、あの段ボールを被って移動してもよいだろうか！？」

「別に構わねーけどよ」

「感謝する！」

なのははあり得ない程の素早さで段ボールに飛び付いた。その勢いでユーノが床に放り出される。そこへクロノが、

「ン、そこのおフェレットオ。もう、いつもの姿に戻ってもいいんじゃないアねえーの？」

「あ、それも、そうだね」

ユーノがそう言うと、突然、ユーノのからだがなのはのセットアップよろしくフラッシュし、光が晴れるとそこにはなのはと同年代の少年が立っていた。

「なんだと！？」

なのはは（段ボールの中で）驚きの声をあげる。

「なのはにこの姿見せるの二回目だよね？」

「いや、今回が初めてだ・・・」

「えっ？」

ユーノは動揺する。

「初めて僕とあったときこの姿じゃなかった？」

「その姿だったら君を動物病院につれていくかね」

言われてみればそうだ。ユーノなのははに謝った、が、なのはは段ボールの中のため、まるで段ボールに謝っているようだった。

「ここがア、リンディ提督のオ、部屋だあ」

クロノに案内され訪れた高級士官の部屋はまさしく「日本被れ」といった感じの内装で、日本にいて9年にもなるなのははにしてみれば突っ込みどころ満載であった。

「よくいらしてくれたわね。ええっと、ユーノさんと、なのはさん

「えっ？なんで段ボール？」

リンディを見たとき、ユーノは少し安心した。

リンディはこの若本擬きの実母だと言うので、また変なひとではないかと心配していたのだ。

「お茶でもいれましょうか」

どうやら職務質問を受ける身の自分達をもてなしてくれるようだ。

「あら？この茶筒、えらく固いわね・・・ンンン！」

リンディは掛け声と共に一気に力を加えた。

「セーリーックス！」

スポーーン！

「ふう。開いたわ」

「いやまてまてまてまてまてまてまて！」

あまりに自然な流れだったため、ユーノは突っ込むのを危うく忘れるところだった。

「何ですか今の掛け声！？」

「蓋も開いたし、今淹れるわね」

「ひとの話を聞けや！」

騒ぐユーノをさらりと無視してリンディはお茶―抹茶をたてる。

「セセセセセセセセセセセセセセセセセセーリーックス！」

「・・・出来たわ。なのはさん、どうぞ」

なのはは段ボールから腕だけをズボッ！と突きだして抹茶を受け取った。

「・・・うまい！極上の仕上がりだ！」

「なにが『極上の仕上がりだ！』だよ！突っ込めよ！」

「ユーノオ、なーにを騒いでいーやーがーるー。提督の『セックス！』はア、別に性行為を意味するものではない。そういえば、昔俺の友人から聞いたジョークでよお、海外でえびザがなんか発行するときによお、性別を書けって言う意味の『sex』の欄に、『週五回』テエ書いちゃったんだてき。ぶるあああ。バーカだよねソイツ。週五回だってよ。やり過ぎだってヴァ。週休二日制かよって

いやまじで」

「知らねーよそんなこと!」

嗚呼なんということだろう! 時空管理局に捕まるわ、ジュエルシード集めできないわ、執務官が若本だわ、んでその上司兼母親は精神崩壊してるわ・・・。

ユーノは次元世界の未来を憂れていた。

続くの!

おまけ

機動六課に教導官がやって来た!

ティアナ「教導官って誰だろ?」

スバル「なのはさん張りのすごいひとじゃない?」

バニング「俺が新任のサウス・バニング一尉だ!」

新番組『魔法大尉リリカルバニング』

バニング「ランスター! ナカジマ! モンディアル! ルシエ! 準備はいいか? 俺にペイント弾を一発でも当てればお前らの勝ちだ!」

みんな「了解!」

開始10分後――

パパパパパパ！（ペイント弾発射音）

エリキャラ「でーい！」

バニング「モンディアル！ルシエ！お前らは戦死だ！そこで反省してろ」

エリキャラ「はい（ノド）…」

ティアナ「エリオとキャラがやられた？スバル！」

スバル「おう！」

更に10分後――

パパパパ！

スバル「まーい！」

バニング「ナカジマ！動きが単調すぎるぞ・・・ランスターか？」

ティアナ「でーい！」

パパパパパパ！

全て避けるバニング。

バニング「無駄弾を撃つな！」

ティアナ「そんなこと言ってたててΣ（ノド>）」

バニング「無駄口もだ（△´）！」

なのはもびる壮絶な訓練！

しかし、それにも成果が！

ティアナ「ロックオン・・・やった！」

バニング「フッ、素晴らしい連係プレーだ。上達したな」

スバル「バニング一尉のお陰です！」

エリキャロ「そうです！」

バニング「ははは！ありがとうございます」

平和に過ぎて行く日常。しかし、それに終わりが・・・。

変態「私はジェイル・スカリエッティ。UC ではブライトさんだがそんなことドーデモイイ。私はこの世をけちよんけちよんにしてやる」

繰り広げられる戦い。

その時、バニングは――。

バニング「ここは俺に任せて、お前らはゆりかごに突入しろ！」

シュゴー！（バニング突貫）

みんな「バニング一尉——！」

そして、戦士は空を駆ける——。

2012年、2月31日 公開！

## 第八話 アースラなの（後書き）

リンデイさんについては後悔していない（――；）。

だって精神崩壊シリーズが普通にようつべにあるんだもん。問題ないもん。

文句は聞かないもん。ほ、ほんとだもん！

アスカ「……………きもちわるい」

終劇



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5500y/>

---

魔法少佐アナベル・ガトー

2011年11月26日22時58分発行